

## 新宮学『北京の歴史——「中華世界」に選ばれた都城の歩み』

*History of Beijing: Journey of the Capital City Chosen by the “Sino-world”* by Manabu Aramiya

渡 辺 健 哉

WATANABE, Kenya

一般的に中国の歴史的都市というと、ドラマや小説の舞台となる唐の長安をただちに想起するかもしれない。しかしながら、より長い期間にわたり中華世界において王権・政権の所在地であり続けたのが、現在の中華人民共和国の首都＝北京である。

本書は、『北京遷都の研究——近世中国の首都移転』（汲古書院、2005年3月）で、明代に行われた北京遷都の全貌を詳細に跡づけた著者の描く北京の通史である。

まずは本書の目次を示しておく。

- 第1章 文明の辺境—燕国
- 第2章 東北の重鎮—幽州
- 第3章 諸族争奪の舞台
- 第4章 中都から大都へ
- 第5章 華夷一統のために
- 第6章 拡大された中華帝国
- 第7章 皇帝の住まなくなった紫禁城
- 終章 廢墟からの再生

以下、各章の内容を紹介していきたい。

「第1章 文明の辺境—燕国」では、北京の環境と戦国時代までの北京地区について述べる。古代中国における政治・軍事・経済の中心であった中原から遠く離れた、現在の北京地区に都市の遺構が確認されるのは、周代

以降である。古くから、北京の周辺地域が人々を居住させるのに十分な条件を備えていたことを意味する。本章の最後では、司馬遷『史記』で劇的に描かれる、秦王政（後の始皇帝）の暗殺を図った刺客荊軻を差し向けた燕太子丹に関わるエピソードが触れられる。「始皇帝暗殺」という中国史に残る有名な事件において、北京地区が一つの舞台であったことを印象的に紹介する。

「第2章 東北の重鎮—幽州」では、始皇帝による秦から、様々な民族の争奪の舞台となる五胡十六国時代を経て、隋唐の幽州城までの歴史が述べられる。本章では、北京の発展にとって重要な役割を果たす——著者の北京研究にとっても重要な——南北を貫く運河の開削に触れている。この時の運河は、後の時代のように直接北京の都市空間に流れ込むものではなかったが、これにより、北京地域と中原が結ばれた意義は大きい。大運河の運用は、船舶を利用した輸送により、多くの物資が北京にもたらされただけでなく、沿道の人々の働き口を増やし、また沿道の整備にもつながった。なお、中国の運河の歴史に興味を持たれた方は、本学の名誉教授である星斌夫によって著された『大運河——中国の漕運』（近藤出版社、1971年1月）を一読されると

よいだろう。

「第3章 諸族争奪の舞台」では、安祿山の登場から、燕雲十六州をめぐる遼朝の統治について述べる。本章前半の主人公は、安祿山と彼による反乱＝安史の乱である。最近の森安孝夫、森部豊の研究成果を踏まえつつ、安史の乱を北京史に位置づけた。安祿山の選んだ国号が「大燕」であったことから(105頁)、彼のアイデンティティが北京地区にあったことを改めて確認できる。次に述べられる遼の登場と、燕雲十六州の割譲が、中華世界にとっての重要な転機と紹介されている。燕雲十六州についても、そこを「争奪の舞台」として理解するだけでなく、遼朝の統治下で実は安定した生活が営まれていたことを伝える。

「第4章 中都から大都へ」では、金による中都建設から、元による大都建設について述べていく。これまでの一般書ではあまり注視されてこなかった金の中都に注目した点は本書の特色である。とりわけ海陵王による遷都については、

①これ以後、近世中国において北方諸族が中国本土に本格的に腰を据えて統治を始める契機となった。

②北京史からみても、首都としての北京の地位が確立する起点となった。

として、大きな画期に位置づけた。そのため、本書では、海陵王による遷都、中都の建設、宮殿の配置について詳細に述べる。その後と言及されるのが、やはり大きな転機となる元の大都である。ここでは大都の歴史的意義について述べるとともに、遊牧地域と農耕地域をつなぐ両都巡幸制についても注意が払われている(199頁)。

本章の冒頭で述べられている燕山府につい

て、一言しておく。燕山府は、北宋から南宋に移行するほんのわずかな期間の北京地区の呼称であった。歴史的にみれば、統治の実態を伴ったものとはいえないが、櫻井智美は、宋元代に広く読まれた類書『事林広記』に、「燕山府」の呼称が出現する事実に注目し、本書が南宋の立場を強く反映した書物であったとみる(『事林広記』に見る江南知識人の正統意識－「地輿類」の分析を中心に－『駿台史学』第178号、2023年3月)。燕山府という呼称は、宋代士人のアイデンティティの反映といえよう。

「第5章 華夷一統のために」では、明における北京の軌跡をたどる。長い北京の歴史でエポックメイキングとなるのが、永楽帝の北京遷都である。当初、南京を王権の所在地とした明朝は、永楽帝の時代になって、彼の根拠地であった北京に遷都する。著者による一連の研究で明らかにされたように、永楽帝の北京遷都は、長い時間・複雑な過程を経て結実した、明朝最大のプロジェクトであった。まず永楽帝時代の北京遷都を、①南北体制の施行、②造営工事の開始と第一次巡幸、③第二次巡幸と西宮建設、④宮城建設と最後の巡幸と四つの段階に分けて紹介し、さらに俯瞰して、①南京と北京の両京体制の創始(1403)、北京遷都(1421)、南京還都(1425)、北京定都(1441)という過程をたどって、北京遷都が完成したことを明らかにした。

「第6章 拡大された中華帝国」では、明清交替から清代の北京の様相について述べる。明清交替は漢族から満洲へ統治者が変わったという点で、社会に大きな変化を与えた。新たな統治者のもとで、北京は多民族複合国家の都として相応しい空間となる。その

一つの象徴が内城と外城における居住者の住み分けである。皇城を取り囲む内城から南側の外城へ漢人の強制退去がなされた結果、外城には漢人官僚や商人が居住するようになった。その影響は、整然と碁盤目状に区割りされた内城に対する、前門から放射線状に街路が延びる外城という形で、都市景観の変化にも及んだ。こうして生まれた都市景観こそ、現在の北京の魅力ともいえるであろう。

「第7章 皇帝の住まなくなった紫禁城」では、清朝の歴史をたどりつつ、紫禁城の建物を詳細に紹介する。読者は天安門を経て午門より紫禁城をめぐる旅行を味わえる。本章の表題に従えば、清朝の皇帝は紫禁城内に常駐していたわけではなく、西郊の離宮や熱河行宮に滞在することが多くなった事実を紹介する。一例として、『康熙起居注』にもとづきつつ、1714年の康熙帝の紫禁城に宿泊した期間が、わずか22日間であったことを明らかにする(339頁)。意表を突く章題と、清朝皇帝と北京との意外な関係に読者は驚かされるかもしれない。本章の最後では、清朝後半の動乱から、義和団事件下の八ヶ国連合軍による北京城占領までを概述し、次章冒頭の「北京最後の日」に至る過程をたどる。

本誌の性格上、「大清道光二十七年歲次丁未時憲書」については(321頁、図版57)、是非とも触れておきたい。これは山形大学中央図書館に所蔵される伊佐早謙の旧蔵書から、著者らによって見出された、道光27年(1847)の曆書である。著者の調査によれば、国内外の漢籍善本目録類を引いてもその所蔵が確認されない、「天下の孤本」である可能性が高いという(新宮学「本館所蔵の160年前の中国のカレンダー」『山形大学附属図書館報 や

まびこ』第57号、2006年10月)。なお旧蔵者である伊佐早に関する著者の論説も公表されている(同「近代山形最初の郷土史家、伊佐早謙の仕事」『西村山地域史の研究』第36号、2018年9月)。

「終章 廢墟からの再生」では、義和団事件直後の北京の状況から、辛亥革命による宣統帝の退位を経て、中華人民共和国成立による北京の改造工事、とりわけ国民広場と改造された天安門広場の外観を軸に、現在の北京に至るまでを述べて、本書は結ばれる。

\* \* \* \* \*

本書を通読した読者は、北京の歴史をたどることが、実は中国の歴史をたどることと同義であることに気がつくであろう。まさしくこの点について、

近世以来、現代にいたるまで首都でありつづけてきた北京の歴史をたどることは、拡大しつづけてきた中華世界の歴史的特質と、成立当初には五十六からなる多民族国家をみずから標榜し、現在では「中華民族」を豪語するまでにいたった現代中国のありようを探ることにほかならない(25頁)。

と冒頭で記している。

それでは、これほどの長期にわたって北京が都であり続けた理由を本書ではどのように説明しているのか。本書の核心ともいえるべき一文を引用する。

北京に首都を遷す意味、それはただひとつ、農耕世界と遊牧世界の両境界にひろがった、拡大された中華世界に君臨できるという地政学的事実、それこそがもっとも重要であった(294頁)。

明快に述べられているように、二つの異な

る世界の境域に位置した北京は、様々な人・モノの交差する空間となり、東ユーラシアの領域の拠点として発展を遂げた。こうした背景を踏まえて現出した様々な特色こそ、北京という都市の魅力といえるであろう。

本書で扱われている史料についても触れておきたい。本書では、室町時代の五山僧の策彦周良、イエズス会宣教師マッテオ・リッチ、江戸時代の日本人漂流民、フランス人作家ピエール・ロチ、明治時代の軍人柴五郎等の眼に映った北京や宮廷の様子が紹介されている。こうした外国人の手になる記録には、当地に住む人が書き残すことのない、「当たり前」の日常」が描かれることも多い。北京を訪問した人間は無数にいる。今後、そうした人々

の手になる記録を読むことで、新たな北京の一面を見出す機会もあるだろう。

以上、本書の内容を簡単に紹介した。現在もこれからも日本と中国の関係は様々な意味で重要である。中国を知るための入口として、北京の歴史を通覧した本書は、多くの読者に有益な示唆を与えてくれるに違いない。

※新宮学『北京の歴史——「中華世界」に選ばれた都城の歩み』（筑摩選書263、筑摩書房、2023年9月）

**附記：**本稿はJSPS科研費JP23H00015、JP23K00846、JP21K00886による研究成果の一部である。